別添４

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
農産・蚕糸部門

「うれしの茶」の維持・継承を担う生産技術の研鑽と地域活性化の取組

〇氏名又は名称　三根　孝之
〇所　　在　　地　佐賀県嬉野市
〇出　　品　　財　産物（茶（蒸し製玉緑茶））
〇受　賞　理　由

・地域の概要

嬉野市は佐賀県南西部に位置しており、中山間地は「うれしの茶」の産地となっている。全国茶品評会において、令和５年は蒸し製玉緑茶の部で農林水産大臣賞及び産地賞を受賞し、釜炒り茶の部では令和元年から令和５年まで連続して農林水産大臣賞及び産地賞を受賞しており、高い茶生産技術が全国的に評価されている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

三根孝之氏は、明治 31 年の初代創業者から代々続く茶業の家系の５代目であり、平成 19 年に親元就農した。生産技術の習得に取り組む傍ら、産地の茶生産者の減少に危機感を持ったことをきっかけに、地域の活性化に向けたうれしの茶の販売促進に精力的に取り組んでいる。令和２年に父から経営継承した後も品評会や販売先での評価は高く、また、経営基盤強化に向けた独自ブランドの創設により直接販売を拡大する等、高品質な茶生産を重視した安定的な経営が行われている。

・受賞者の特色

（１）高い栽培技術を活かした作期分散及び高品質な茶生産の実現

一番茶・二番茶ともほぼ全ての茶園で被覆栽培をすることにより、茶の品質を向上し高い収益を上げている。茶園の基盤整備・乗用型機械導入率向上による省力化や改植による品種構成の改善の他、茶園ごとの標高差を活かした計画生産や高い被覆栽培技術による摘採時期の制御により作期を分散し、少ない労力で高品質な茶生産を実現している。

（２）うれしの茶の高品質な茶生産技術の継承

就農した当初から、高品質な茶生産のため生産者同士で技術を研鑽する「嬉野銘茶塾」へ積極的に参加し、研修会や互評会等を通じて先輩の生産者から生産技術を学んできた。現在では、氏が後輩らへ教える立場となり、産地の茶生産技術の継承を担う中心人物となっている。

（３）若手茶生産者をけん引する地域活性化の取組

子供世代のため未来の茶業を守りたいとの思いから、産地の若手茶生産者をけん引し、新たな顧客層の獲得に向けた紅茶生産・販売促進を行う「うれしの紅茶振興協議会」や、人と人との繋がりを大切にしたコンセプトのギフト商品を開発した「グリーンレタープロジェクト」等に取り組み、生産者間のネットワークの強化・地域の活性化に大きく貢献している。

・普及性と今後の発展方向

産地を代表する高品質な茶生産を行うだけでなく、後輩生産者への技術指導や地域活性化の取組により、地域での信頼は厚い。また、同市内の異業種とも連携した地域活性化の活動でも存在感を示しており、農業の垣根を超えた活躍も期待される。

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
園芸部門

大規模な園地整備と手厚い新規就農者支援により短期間で優良産地へ発展

〇氏名又は名称　JA 岡山加茂川ぶどう部会（代表　瀬尾　和弘）

〇所　　在　　地　岡山県加賀郡吉備中央町

〇出　　品　　財　経営（ぶどう）

〇受　賞　理　由

・地域の概要

加茂川地域は、岡山県の中心部に位置する吉備中央町の東部に属する。吉備高原と呼ばれる高原地帯で年間平均気温が14.5℃と、温暖な気候の県南部と比較するとやや冷涼な地域である。昼夜の温度差が大きいため、ぶどうの栽培に適しており、特に着色系品種の栽培には有利な地域となっている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

野菜や葉たばこの生産が中心の地域だったが、平成24年から行われた町営牧場跡地を利用した団地整備を契機とし、平成28年には岡山県の目玉事業である「岡山ハイブリットメガ生産団地」に選定されたことで、ぶどうの生産基盤の整備が進むとともに、県や町と連携した新規就農者支援の取組を充実させることにより、ピオーネやシャインマスカットなど消費者ニーズに合った付加価値の高い品種の栽培面積を拡大し、令和４年には販売金額２億３千万円を達成した。

・受賞者の特色

（１）作業性に優れた園地の整備と出荷期間の拡大による有利販売

県等の事業を積極的に活用することで、10.3ha、28 区画の生産団地を整備した。なお、整備にあたっては、農業機械の利用を想定し、園地は緩傾斜とするとともに、周囲に作業道を設置し、作業の効率化・軽労化を図っている。また、花きからぶどうに転換した生産者が所有するハウス等を活用した加温栽培の拡大や専用冷蔵庫による貯蔵を行うことで出荷期間の拡大を図っており、市場での有利販売と生産者の所得向上を実現している。

（２）関係機関と連携した新規就農者への支援

県、町、JA 及び農業公社と一体となって研修制度を構築している他、就農直後から収入を確保するための成木園地貸出制度、農業公社が借り上げた園地で植え付けから若木の管理までを研修できる制度等の取組により、スムーズな就農と早期経営確立を支援している。これらの制度を活用してこれまでに９名が新規就農しており、産地を支える重要な担い手となっている。

・普及性と今後の発展方向

貸借・売買可能な園地のデータベース化や補助事業を活用した園地整備により、担い手への園地集約を推進するとともに、新規就農者と多様な担い手の確保に努め、引き続き産地の抱える課題の解決を図っていく。

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
畜産部門

稲発酵粗飼料を中核として耕畜連携体制を実現したTMRセンター

〇氏名又は名称　広島県酪農業協同組合　（代表　温泉川　寛明）

〇所　　在　　地　広島県三次市

〇出　　品　　財　技術・ほ場(飼料生産部門)

〇受　賞　理　由

・地域の概要

三次市は、中山間地域の狭小な耕地が多い広島県の北部に位置し、全2,262 農業経営体のうち５％が畜産業に従事している。農業産出額は130億円であり、そのうち畜産は54％を占め、畜種別では鶏、豚、乳用牛の順であり、生乳は7.2億円である。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

広島県酪農業協同組合は、平成６年４月１日に県内18の酪農専門農協が合併して設立され、平成26年に「みわTMRセンター」を拡大整備した。当初20.3haであったホールクロップサイレージ（WCS）用イネの栽培面積は令和４年度に 144ha（704筆）にまで拡大し、酪農家44戸に主にWCS用イネ混合TMRを供給している。

・受賞者の特色

（１）高品質な極短穂型WCS用イネの安定生産

① WCS 用イネを栽培する営農集団に共通の栽培マニュアルで統一的な指導を行い、営農集団間で差の無い高品質WCS用イネの安定生産体制を確立した。その際、営農集団ごとに収穫物の飼料分析を行い、水田の肥培管理に活用した。

② 籾が少なく消化性の高い極短穂型WCS用イネ品種に栽培を集約したことで、栽培暦の統一、高品質WCS用イネの安定生産、均質なTMR調製が可能となった。

（２）耕畜連携による自給粗飼料の確保と高品質TMRによる良質生乳生産

① 県内1/4の耕種農家と連携してWCS用イネを栽培し、粗飼料の40%を自給し、圧縮梱包機を用いた高品質発酵TMRを単価49円/kgで酪農家に供給している。

② 栄養的に均質な発酵 TMR を給与メニューと共に酪農家に提供することで飼養管理の平準化が図られ、県平均よりも良質の生乳生産を夏場も含めて達成している。

（３）堆肥還元による地域資源循環と環境保全の達成

酪農家の堆肥を、多肥が可能な極短穂型 WCS 用イネ栽培水田や野菜農家に提供することで、地域資源循環型生産システムを構築している。その結果、耕作放棄地や糞尿の捨て場的な草地が解消し地域の環境保全が達成されている。

・普及性と今後の発展方向

WCS用イネを用いるTMRセンターを核とした耕種農家と酪農家の連携は、酪農家の経営改善と資源循環型農業を達成しており、都府県の中山間地のロールモデルとなる。今後、参画する両経営体を全県に拡大予定であり、更なる発展が期待できる。

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
林産部門

認証森林での高密度路網と車両系林業機械の活用による高収益な林業経営

〇氏名又は名称　山田　芳朗

〇所　　在　　地　静岡県静岡市

〇出　　品　　財　経営（林業経営）

〇受　賞　理　由

・地域の概要

静岡市は、面積の76％を森林が占め、民有林の44％が人工林となっている。市では森林整備を通じて供給される地域材の利用を促進するため、公共建築物の木造化、木質化を進めるなど、持続可能な森林経営の取組を進めている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

山田氏は、157ha の森林を所有しており、うち 152ha については地域の森林所有者と共同で森林経営計画を作成し、林業経営を行っている。高収益な林業経営を目指し、積極的に作業道を開設し、その充実した路網において車両系林業機械を利用した間伐を行い、年平均 690m^3 の柱材を主とした良質な木材を生産している。

・受賞者の特色

平成５年、近隣の林家との協業体を立ち上げて、グラップルやフォワーダの共同利用を推進してきた。作業道を積極的に開設し、開設にあたっては、切土高を低く抑え、こまめな排水処理により壊れにくい道となるよう工夫している。115m/ha の高密度路網に車両系の高性能林業機械を投入し、林業収支がプラスとなる経営を続けている。

林業研究グループにおいて、森林認証部会を立ち上げ、平成 17 年にすべての自己所有林を含むグループの所有林で森林認証を取得した。森林管理認証基準に基づいた森林管理方針書の作成、認証林において森林施業や教育研修、巡視、森林被害の調査等を定期的に実施し、収益を確保しつつ持続可能な林業経営を確立している。

・普及性と今後の発展方向

森林認証制度については、静岡市の林業家、製材所、建築士で組織する「しずおか森と学ぶ家づくりの会」等と連携し、産業フェアしずおか等のイベントでの普及活動に取り組んでいる。

また、指導林家として若手の林業家や林業従事者の技術力の向上に取り組むほか、県環境学習指導員として地元小学校を中心に森林教室の講師を務めるなどの活動にも取り組んでいる。

今後は、面的なまとまりを重視した施業を行うため、隣接する森林所有者に対する施業委託の働きかけを行い、また、条件が合えば山林を購入し、経営面積を拡大する予定である。

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
水産部門

地元の鮮魚（エソ）を使用した高品質のかまぼこ

〇氏名又は名称　有限会社　三好蒲鉾（代表　三好　忠之）

〇所　　在　　地　山口県萩市

〇出　　品　　財　産物（水産加工品）

〇受　賞　理　由

・地域の概要

受賞者の工場がある萩市は、日本海に面しており県内でも有数の漁獲量を誇る地域である。その沖合には対馬海流と大小の河川が流入し、点在する多くの島々や天然礁の存在、さらに、朝鮮半島に向かった広大な大陸棚のもとで、全国有数の好漁場が形成され、萩のブランド魚を含む250種類ほどの魚介類が漁獲されている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

主な事業はかまぼこ製造業である。受賞者はからだに優しい練製品づくりを理念としており、高品質な練製品を製造すると同時に、添加物をなるべく使わないこと、地域食材を原料として活用すること等、消費者の健康、地域活性化という点にも配慮している。受賞財は、年々売り上げが伸びている商品である。受賞者の商品は受賞財も含め、山口県の認定である「山口海物語」に５商品も認定されており、山口県の水産加工業を牽引している。

・受賞者の特色

受賞財はかまぼこの中でも「焼き抜き」という種類で、萩地方発祥のかまぼこであるが、萩の焼き抜きの特徴は、低温で加熱して焦げ色を付けないように焼き上げる点にある。甘味はそれほど強くなく、魚のうま味を塩味で整えている。かまぼこ等の練製品は一般的には、冷凍すり身が使用されるが、受賞財は、萩市産の生原料を使用している。生原料を使用する際は、原料が漁獲される季節、漁法、魚種、大きさにより品質にばらつきがあるが、人工添加物を使わず、先代からの伝承、自ら築き上げてきた経験や技術により高品質な製品に仕上げることに成功している。

・普及性と今後の発展方向

受賞者は地域の水産資源を有効活用し良質な原料の特性を活かしながら伝統製法を守り受賞財をはじめとするブランド力のある製品を種々生み出している。また、山口県の特産品である練製品製造を軸にして、地域活性化のイベントの企画や教育活動など他地域の水産業振興の見本となるような取組も行っている。こうした取組は日本の各地域に多々ある地域漁業と深く結びつく中小水産加工業の今後の発展の道筋を示すものとして普及性が高いと評価された。伝統的な手法を用いた近年の健康志向の消費者ニーズにあった製品開発、山口県ブランドへの貢献から更なる発展が期待される。

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
多角化経営部門

農外から新規参入し「サラリーマン農業」を目指す

〇氏名又は名称　株式会社　かまくらや（代表　藤本　孝介）

〇所　　在　　地　長野県松本市

〇出　　品　　財　経営（そば、加工用トマトほか）

〇受　賞　理　由

・地域の概要

松本市は、長野県の中央部に位置し、日本の屋根と呼ばれる北アルプスと美ヶ原公園に囲まれた盆地で、多様で豊かな自然や風土と、大消費地に比較的近い立地を活かした農業が展開されている。水田地帯では、豊かな用水を活用し、水稲とともに、麦・大豆等が生産され、大規模な農業法人・集落営農組織も育っている。

・受賞者の取組の経過と経営の現況

株式会社かまくらやは、自動車販売業を営む前代表が「リーマンショック」で売れない時に、信州そばの原料ニーズに対応するため、平成 21 年に農業へ新規参入した。耕作放棄地を開墾・再生し、積極的に機械化・IOT 化による経営を進めている。

・受賞者の特色

（１）そば二期作への挑戦と６次産業化

長野県では、米の裏作の秋そば一作が主流であるが、かまくらやは、そば生産を主軸とした経営を確立するため、夏・秋二期作により、収量アップと規模拡大を図ってきた。現在では 100ha を超える圃場でそばの二期作を実現し、長野県最大生産量の農業者となっている。また創業当初から６次産業化に取り組み、そばの製粉施設やかりんとう工房を設置し、観光客に提供する飲食施設も開設した。

（２）地元からの採用と会社全体で作る経営指針書

地元の農業高校卒業者等を積極的に雇用し、定着のため、他産業と同じ雇用環境づくりをしている。また毎年、経営指針書を社員全員で作り発表会を行い、途中でも進捗を確認し PDCA サイクルを回して改善しながら目標達成を目指している。

（３）農福連携の推進

障害者の安定した雇用の確保と定着を目指して、令和２年に子会社として就労継続支援Ａ型事業所を設立し、かまくらやの作業受託を中心に、畦畔除草、収穫作業、カット野菜加工等の業務で賃金を支払い、自立につなげている。

・普及性と今後の発展方向

令和５年に社員から２代目の社長が就任した。経営理念を継承した社員から社員につなぎ、今後もさらに改善を図って、安心して定年まで勤められる「サラリーマン農業」を実現する会社として、農業で地域の雇用創出に努める。また、経営の多角化と多品目化によりリスク分散をしながら強じんな経営への転換も進めていく。

令和６年度日本農林漁業振興会会長賞受賞者受賞理由概要
むらづくり部門

有機農業で持続可能な交流・定住を～農は最高の教育資源～

〇集団等の名称　特定非営利活動法人　アグリやさと（代表　柴山　進）

〇所　　在　　地　茨城県石岡市

〇受　賞　理　由

・地域の沿革と概要

石岡市八郷地区は、茨城県のほぼ中央部、首都圏からおよそ70km圏内に位置し、筑波山等の山並みに三方を囲まれた盆地型の地形を形成している。たばこと養蚕が盛んだったが、昭和60年代のたばこ減反政策や中国からの絹製品の輸入の増加により、生産農家が減少した。本地域を管轄するJAやさとでは、昭和51年から生協産直による野菜づくりへの転換を進めており、平成９年に消費者に安心安全を届けるために、有機栽培部会を設立した。

・むらづくり組織の概要

JAやさとは平成９年の有機栽培部会の設立後、平成11年には新規就農研修農場「ゆめファーム」を設置し、年間数多くの新規就農生産者の育成や中学生等の農業体験の受入れを行ってきたが、JAの担当職員の負担の増加により体験受入事業の継続や新規就農研修の拡大が困難なことから、別組織で担っていく必要性が生じた。

こうした中で、石岡市、JAやさと、生協などの関係機関で検討を重ね、平成20年に「特定非営利活動法人アグリやさと」が設立され、農業体験を受入れる「朝日里山学校」、新規就農者の研修を行う「朝日里山ファーム」の管理運営を担っている。

・むらづくりの取組概要

（１）農業生産面

①　朝日里山ファームでは、１年１家族の受入れを行い、２年間有機農業の研修を行った後、地域内で独立してもらう仕組みであり、これまでに５家族がJAやさとの生産者として独立している。

②　JAが運営するゆめファーム卒業生も含めて、JAやさとの有機栽培部会は32名のうち26名が新規参入農家で､朝日里山ファームは有機農家の育成に貢献している。

③　朝日里山学校は、食体験、農業体験、工芸体験、林業体験の受入れを行い、令和５年度には小中学校、高校、生協組合員など合計で約12,000名を受入れた。

（２）生活・環境整備面

①　廃校は当時の姿のまま朝日里山学校として利用され、雑草などに覆われていた遊休農地は体験農場に整備されるなど、美しい農村景観に生まれ変わったことで、地元の方には喜ばれ、来訪者には感動を与えている。

②　有機野菜作りを体験する親子は、地元生産者と交流しながら、有機栽培を体験することで、有機農業の理解者になっている。

③　就農相談会に積極的に参加し､研修生の発掘や常時就農相談をしている。また、空き家情報の提供によってイチゴ生産者などの移住につなげている。

・他地域への普及性と今後の発展方向

本取組は、廃校を改修した体験型観光施設「朝日里山学校」を核とし、小学生や中学生の農業等の体験受入活動による農業･農村への理解の醸成に努めるとともに、地元住民と都市住民等多くの関係者との連携により、農地の保全、農村文化の伝承に寄与している。更には有機農業を推進するための新規就農者の育成・確保に取り組むなど今後の更なる発展が期待できる。継続した事業運営の確立に向け、後継スタッフの調整・確保などの検討も進めており、今後の展開方向も明確化している本取組は、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。